

特別 寄稿

第17回 EAROPH 地域セミナー開催

国土政策研究会専務理事・EAROPH 理事
嬉野市地域セミナー推進監・実行委員会委員

小浪 博英
三根 清和

平成27年6月1日から3日まで、第17回EAROPH地域セミナーが、EAROPH本部（マレーシア）、EAROPH Japan（都市計画協会内）、佐賀県、嬉野市の共催、国土交通省後援、九州旅客鉄道、佐賀県観光連盟、嬉野温泉観光協会、嬉野温泉旅館組合の特別後援、都市再生機構など多数の協賛により、佐賀県嬉野市に於いて開催され、同時に第48回EAROPH理事会が開催された。

EAROPHとは、1956年にニューデリーで第1回の設立大会を開催し、アジア、豪州、太平洋地域の全ての国々を対象とする国連に公認されたNGOであり、IFHPとは姉妹提携をしている。その本部は1978年にインドからマレーシアに移された。今回の参加国はオーストラリア、中国、香港、インドネシア、マレーシア、タイ、フィリピン、韓国、日本の8カ国・1地域、参加人数は外国人37名、日本人255名、合計292名であった。外国人の中には佐賀大学、熊本大学、九州大学、大分大学などへの留学生が、日本人の中には塩田工業高等学校の教諭と生徒100名余が含まれている。また、本セミナーのメインテーマは「地域資源を生かした活力ある都市・住宅の形成」、サブテーマを「人間居住・環境」、「医療・観光（温泉を含む）」、「インフラ（交通）とまちづくり」としたが、サブテーマの方は必ずしも明確に区分することはできなかった。



写真2 ヘルマント会長の作品

プログラムは、初日に茶業研修施設等視察、開会式、基調講演、パネルディスカッション、歓迎レセプションを、第2日にEAROPH理事会、研究発表会、閉会式、第3日に九州陶磁文化館、窯元深川製磁社のチャイナオンザパーク「忠治館」視察などであった。以下にその概要を紹介する。

開会式と基調講演

嬉野市社会文化会館リバティで開催された開会式では、組織委員会会長佐賀県知事代理の副島良彦佐賀県副知事、実行委員会会長である谷口太郎嬉野市長、国土交



写真1 谷口市長の歓迎挨拶

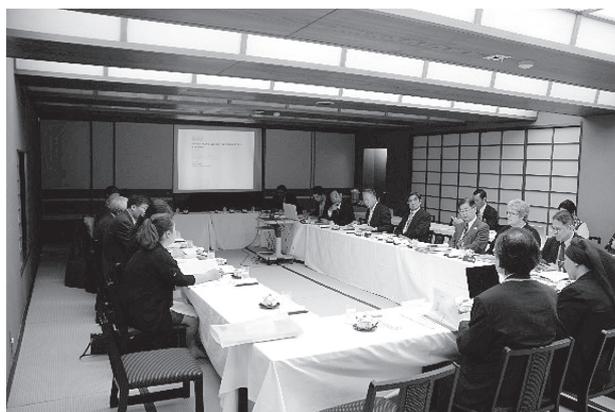


写真3 理事会風景

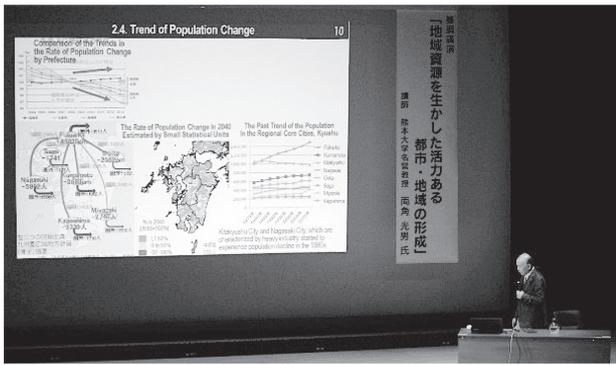


写真4 両角名誉教授基調講演

通省小関正彦都市局長、都市計画協会の板倉英則会長、EAROPH 会長の Dr. Hermanto Dardak (インドネシア公共事業省副大臣) からご挨拶を戴き、基調講演に移った。基調講演は両角光男熊本大学名誉教授により「個性的な生活圏の形成と交通・情報・人のネットワークの形成」というテーマで、国が推進しようとしている地方創生の考え方、現在作業中の九州圏広域地方計画の概要、熊本の多核連携集約型都市マスタープラン、400年城下町熊本の中心市街地活性化の取り組みが紹介され、参加者は多くのスライドに見入っていた。

パネルディスカッション

基調講演に続いてパネルディスカッションが同会場で開催された。パネリストは日本建築士会連合会会長三井所清典、大分大学工学部福祉環境工学科助教姫野由香、EAROPH 事務総長 Norliza Hashim、EAROPH オーストラリア Donnell Davis、嬉野市長谷口太郎の各氏で、コーディネーターは EAROPH Japan の小浪博英であった。

谷口市長からは嬉野市の戦前からのまちづくりについてお話があり、今は新幹線新駅周辺のまちづくりを進めているとのことであった。続いて三井所さんからは有田の360年の伝統を生かすためのまちづくり、中越地震後



写真5 パネルディスカッション

の山古志復興事業における地元工務店の重要性、奈良県十津川村での水害復旧まちづくりなどの紹介が、Donnell Davis さんからは災害対策としてのインフラ整備はどのように資金を捻出してどのように維持するのかという問題提起が、姫野先生からは地元が気づいて組織的に頑張らないと地域資源も無くなってしまふ、Hashim さんからはマレーシアの自然資源をどのように観光に生かして地方財政に寄与させていくかの戦略が求められている、とのお話があり、議論をする時間は無くなってしまった。詳しくは後日、報告書に収録する予定になっている。

歓迎レセプション

歓迎レセプションは、開会前に地元嬉野高等学校和太鼓部による「嬉昇伝心太鼓(きしょうでんしんだいこ)」の賑やかな演奏が15分程度あり、盛り上がったところで谷口太郎市長、佐賀県和泉県土づくり本部長、都市計画協会矢島国際委員長、EAROPH の Norliza Hashim 事務総長の挨拶が続き、乾杯をしたあと、地元の藤生会の皆様が舞台上で日本舞踊を踊る中、懇親に入った。会場は和多屋別荘で、日本舞踊終了後壇上から降りてきて懇親会に加わって下さった和服姿の藤生会の皆さんと外国人とが満面の笑みで記念写真に収まっていた。進行はオーストラリアの Donnell Davis さんが頑張って下さり、それに乗せられた各国は大変喜んで、またその間、舞台では岩永ゆりさんとそのグループによるバイオリンの演奏もあって、かつての EAROPH のどの会合にも負けない盛り上がりであった。



写真6 嬉野高校和太鼓部

理事会と研究発表会

理事会は EXCO と呼ばれているが、大正屋の福寿の間という大きな和室に絨毯を敷いてテーブルを置き、何とも言えない絶妙な和洋折衷の中、3時間以上にわたり

多くの議論をした。通常は会長が議長になるところ、ヘルマントさんは帰ってしまったので名誉会長の Dr. Soo Young Park さん（韓国）が議長となった。日本からは名誉会長の竹林寛氏のご他界を報告したところ、皆さんがそれを惜しんで黙祷をささげて下さった。主な議論はEAROPHの組織をもっとスマートにしたいこと、併せて現在17頁に及ぶ定款を簡略にしたいこと、各国の評議員（評議員会は2年に1回開催される）の数を現在は基本の4人プラス専門家2人の6人まで認めているが、これを4名以下に統一したいこと、会費を値上げしたいこと、会費前納永久会員制度を廃止したいこと、などであったが、いずれも決定には至らず、事務局で第2次案を作成することとなった。今回はマレーシア・サバ州キタ・コナバル市において2016年9月頃開催することとした。

研究発表会は大正屋の平安の間と千種の間で開催され、合計22報が発表された。全体としてレベルが高く感じたのは、論文委員が執筆者に相当細かく注文を出した成果だと思われる。発表内容は後日、報告書に収録する。



写真7 藤生会の皆さんと記念撮影

閉会式とツアー

閉会式は研究発表会に引き続き大正屋で行われ、谷口市長の挨拶などの後、特に大会宣言などはなかったが、次回、コタ・キナバルでの再会を約して解散した。

ツアーは初日の午前中に茶業研修施設等の視察があり、マレーシアのグループを中心に伝統産業や染物を楽しんできた。第3日には九州陶磁文化館、窯元深川製磁社のチャイナオンザパーク「忠治館」を視察して、パリ万博に出展したという高さ2mに近い大きな花瓶の前で参加者全員の集合写真を撮り、売店では参加者が数々の記念品を購入していた。

以上、海外参加者は日本の地方都市の良さを満喫し、日本人参加者はこのようなところでも立派な国際会議ができたことに感激した。その陰では、谷口市長、中島副市長、三根推進監、中川推進員を始めとする地元の皆様のご努力と、それを支えた都市計画協会、国土交通省、同九州地方整備局、佐賀県など関係機関の皆様のご支援があったのであり、紙上をお借りして深く謝意を表します。（こなみ ひろひで・みね きよかず）



写真8 パリ万博出展作品の前で
（後ろの胸像は深川忠治氏）